

修士（2013 年度）

災害をコンパニオン・アニマルと共に生き抜く

——仮設住宅でのインタビューから——

梶原 はづき

1. 序論

本論文では、「自分と暮らすコンパニオン・アニマル（ペット）を生活の中で最も優先する」価値観を「コンパニオン・アニマルファースト（Companion Animal First、以下 CAF）」と定義し、CAF の価値観を持つ飼い主とペットの東日本大震災における経験を論じた。通常の時であれば、「ペットは家族の一員」という認識は、ある程度社会の中に広がっており、許容されている。しかし、災害時にその「家族の一員」であるペットと同行避難することは、非常に困難であった。2011 年 3 月 11 日の地震発生と津波の混乱の中で、ペットを置いてこざるを得なかった人もいれば、避難所にペットを連れて行ったが入れてもらえなかった人も多かった。CAF という価値観の危機に直面した人々の語りは、災害時だから、非常時だから人間が最優先されるのが当然というドミナントストーリーに対する、オルタナティブなストーリーである。排除でなく包摂を、と言うのは通常の時ならたやすい。しかし、「非常時」「有事」においてこそ、私たちは支配的な物語ではない、オルタナティブなストーリー、オルタナティブな価値観に目を向けなければならない。なぜなら、そのような時こそ、私たちの社会の成熟度が試されるからだ。本研究の目的は、東日本大震災で被災した飼い主たちが、通常の援助の枠組みから排除される経験を経てなお、CAF の生き方を維持するためにしてきた努力、すなわち新しい CAF のコミュニティを構築していった過程と、生活の多様性を、質的研究の手法を使って明らかにすることである。

2. 先行研究

日本では、災害とコンパニオン・アニマルに関する研究はほとんどなく、アメリカでは社会学、心理学、動物学の分野でハリケーン・カトリーナ後の研究が散見される。本研究が最も依拠する先行研究は、以下の 3 つである。やまだは、喪失は他者との意味の亀裂が最も意識され、人生の物語が生み出されるトポスであると述べている（やまだ 2007:53-54）。被災地は多くの喪失が何重にも重なる場所である。そしてそこは、普段は自分がペットと暮らす意味など考える必要がなかった人たちが、突然他者との意味の亀裂に立たされる場所でもあった。また本研究は、過酷な環境の中で、自分の生活、価値観を守るために人々がする行動に関する研究である。その意味で、Smithers がロサンゼルス・ダウンタウンのリタイアメント・コミュニティで行った、高齢者たちの生き抜く戦略についての調査研究の系譜である（Smithers 1985=1988）。さらに、Irvine は、ペットと路上で暮らす 70 人のホームレスの人々にインタビューし、厳しい路上生活をしながらも、ペットを手放さない人たちが、どのようにペットを意味づけているかを分析している（Irvin 2013）。本研究は危機に際した飼い主に対するインタビューを考察していくものであり、Irvine の研究にも近いと言える。しかし Irvin のテーマは、人々がペットを語ることを通して自己をどう語るかであるのに対し、本研究は危機に際して人々がとった行動に重点を置いている。

3. 研究方法

本論文第3章では、データ収集方法と対象特性、倫理的配慮、記述の方法を示した。データ収集方法は1) インタビュー、2) 参与観察であった。宮城県仙台市のA、B二つの仮設住宅でペットと暮らす11名（女性8名、男性3名）に1時間半～2時間の半構造化インタビューを行い、許可を得て録音したデータを逐語的にテキスト化した。また、夕方の犬の散歩の時間、犬を含めた居住者の交流を参与観察した。他にも夏祭り、毎週集会所で行われているカラオケの会などに参加させていただき、随時フィールドノートに記録した。調査期間は2013年8月～9月であった。記述の方法としてはエスノグラフィーを選択した。エスノグラフィーの手法を選んだのは、コンパニオン・アニマルと生きるという一つの文化を描くことのできる手法だと考えたからである。ただし、インタビューからの考察では、語りを活かすためライフストーリーの手法を援用している。

4. 考察

第4章では、まず仙台市の被害状況と、A、B二つの仮設住宅の特徴を述べた。続いてインタビューからの考察では、インタビューーたちの語りから、震災の日の出来事、震災の前の生活を述べた。そして、4章3節3項の「コンパニオン・アニマルファースト（CAF）の価値観の危機——立ち現れる意味の裂け目」では、ペットと避難した飼い主たちが避難所で閉め出されるという突然の排除、周辺化に対して、またペットを亡くした飼い主が周囲の人から理解されないことに対して、どのように応答したかを＜抗する＞＜潜る＞＜かわす＞＜閉じる＞という4つの様相にわけて述べた。4章3節4項の「コンパニオン・アニマルと生き抜く戦略——新しいペット・コミュニティ」では、CAFという強いモチベーションを共有する飼い主たちが、仮設住宅での避難生活で起こるコンフリクトに対し、どのような戦略をとったかを述べた。

・急速な都市化を経験した場所——A仮設住宅のCAFコミュニティ

A仮設住宅は仙台市で最初にできた233戸の仮設住宅である。宮城県外宮城県外からも含め広域から様々な背景を持つ住民が入居している。A仮設住宅はいわば、急速な都市化を短期間で経験した場所なのである。犬の糞や鳴き声など、ペットのいない住民との間で問題が起きたため、飼い主はペットクラブを作って、コンフリクト解消に積極的に活動した。

・沿岸部の生活が維持される場所——B仮設住宅の緩やかなオープン・コミュニティ

B仮設住宅は194戸で、入居している人の7割が、津波被害の大きかった沿岸の若林区荒浜の住民である。犬小屋を作り外で犬を飼う人も多く、「室内飼い」という都会から持ち込まれたルールを穏やかにネグレクトして、海岸地域で昔からコンセンサスのあったローカルなルールに置き換えかえていた。

5. 結論と今後の課題

緊急時の避難行動、仮設住宅の選択、その後の生活をどう再建するかの意志決定にまで、コンパニオン・アニマルと共に生きることが基準となっている人たちがいる事実を、本研究で明らかにすることができた。CAFの価値観を持つ飼い主たちへの理解を深めることは、災害時の避難計画構築や、災害後の復興計画にも寄与する有益な知見であると考えられる。今

後は福島など別の調査地でも研究を進め、東日本大震災の影響を記録するとともに、人と動物が社会の中で共に暮らすことの意味をさらに探求していきたい。

文献

Irvine, Leslie, 2013, *My Dog Always Eats First: Homeless People and Their Animals*, Boulder: Lynne Rienner Publishers.

Smithers, A. Janice, 1985, *Determined Survivors: Community Life Among the Urban Elderly*, New Brunswick: Rutgers University Press. (=1988, 吉井弘訳 『都市に生きる高齢者たち——リタイアメント・コミュニティの生活』 芦書房)

やまだようこ, 2007, 『喪失の語り——生成のライフストーリー』 新曜社.